

目次

モッチャンが死んだ.....	2
幼少時から学生時代.....	2
学生時代と社会人時代.....	3
丑寅辰巳会の誕生.....	4
事業部の仕事の手伝いと檀家世話人.....	5
忘れられない出来事.....	7
1. 藍綬褒章を受章.....	7
仲間との交流.....	7
1. 飲み会.....	7
2. メールやラインでの交流.....	8
3. 嬉しかったモッチャンからの電話.....	9
4. 最後の会食.....	9
5. そして、哀しい別れが・・・.....	10
結び.....	11

竹馬の友・望月郁文君の思い出

モッチャンが死んだ

今年（2021年）の10月2日、小田高11期同期生の望月郁文君が亡くなった。11月5日の81歳の誕生日を目前の逝去だった。幼い頃に知り合ってから仲良くなり年を取ってからも変らぬ友情を育んできて、いつでも会うことができお互いに頼りにしていた友が今はもうこの世にいないなんて、いまだに信じられない。私の一人暮らしを心配してしょっちゅう電話をかけてきてくれたが、あの時の優しい口調が耳に残っていて、今にも電話がかかってくるのではと心待ちにしている自分がある。今でも亡くなったということは信じられないが、私と彼との交流についていろいろ思い出しながら、故人を偲んでみたい。

幼少時から学生時代

私とモッチャン、（幼時から彼は周りからこう呼ばれていて私たちごく親しい6人の仲間はいつでもこう呼んでいたのでこの稿では以後モッチャンと呼ぶことでお許し願いたい。）は生家がごく近くにあった。彼の生家は曹洞宗の寺院で名称は定林山宝安寺。国府津方面から西に向かう国道1号線が大きくカーブして正面に小田原市民会館を望むあたり、今はさがみ信用金庫本部があるがその裏手にある。当時はそのあたりは国道に面して近藤外科、西山歯科、竹広材木店などがあった。私の生家は今はファミリーレストラン「ロイヤルホスト」があるあたりで、そこは当時は「精華裁縫女学院」（名称はうろ覚えなので定かではない）という裁縫を教える学校があった。私の生家はその学校のすぐ裏手にあり、学校の2階からは我が家は丸見えで学園の生徒たちからよくからかわれたものだ。

それはさておき、宝安寺は歴代住職が社会福祉事業に関心を持ち、当時の住職即ちモッチャンの父親はお寺の境内で小田原託児所（現・小田原愛児園）という保育所を運営していた。私もモッチャンもその託児所で幼年時代を過ごし1947年（昭和22年）3月に卒園、一緒に城内小学校（現・三の丸小学校）に入学、同じ4組に配属となった。毎朝決まった時間に国道の両側の路地から出てきて合流し、**登下校はいつも一緒だった**。小学生時代はよくお互いの家に上がり込んで一緒に遊び、私の母はモッチャンを「いくふみちゃん」と呼んで可愛がった。母は93歳で他界したが亡くなる数年前には認知症を発症、私と会話している時「僕の名前は何だっけ？と聞くとにっこり笑って「イクフミ」と答え、私を苦笑させたものだ。よっぽど幼い時の彼の印象が強かったのだろうか？4年生になる時のクラス替えでも二人は共に4組のままで、結局小学校の**6年間ずっと同じ組**で机を並べたことになる。この4年時の編成替えで同じクラスになった新しい仲間3名が私とモッチャンと仲良くなり、この5名が終生変らぬ友情の絆を結ぶことになった。

その5名とは中澤秀夫、藤井暉生（テルさん）、水口幸治、望月郁文、山本哲照である。この5名の絆は6年生時の担任教師岩本実先生の薫陶を受けてからより強固なものとなった。岩本先生は個性的な先生で型破りな授業が多かったが、私が今でも忘れられないのは「作

文」の授業で6年4組のクラスメートの中から自分の取り上げてみたい友を一人選び、その友のことを自由に思った通りに書くという授業があった。そして出来上がった作文はそれぞれ書いた人が読んで発表し、その作品は書いた人ではなく、取り上げられた人に渡されたのだ。恐らくそれは1952年（昭和27年）の事だったと思われるが、あれから70年近く経過した今でも私の手元に残してある。私を取り上げてくれたのは男生徒3名、女生徒1名だったがモッチャンはその中の一人だった。私の両親やきょうだいのこと、私の科目ごとの成績、私の性格、皆にどう思われているかなど四百字詰め原稿用紙3枚半にわたって書いてくれている。少し抜粋してみると「**国語の成績が良いのに算数はとってできない。僕はふしぎでしょうがない。こんなに差があるのは変だ。それから図画もきらいでへた。習字もきらいであまりうまくない。**」級友との関係については「**山本君はあまりすかれているという方でもない。わるい所はすぐけんかを始める。どこまでも勝たなければ気がすまない。口はとてもうまいし、手はすぐでる。**」と遠慮なくこきおろしている。しかし批判するばかりではなくいい所も認めてくれていて「**山本君は妹おもいだ。小さい妹と遊んだり、一緒に手をつないで帰る。おつかい、るすばん、畑をつだいなどいっしょうけんめいだ。**」今読み返してあの頃のことを目の前に浮かんでくるようだ。そういうモッチャンはどうだったかというと体は大きく、勉強の方もクラスメートの江木紀彦、太田充と3人で常にクラスのトップを争っていて、この3人で4年生から6年生までの3年間クラスの級長、副級長を交互に務めていた。

当時の城内小学校は一学年の人数は300人ほど。5組まであったから一クラスは大体60名だった。その後城山中学校、小田原高等学校と共に進んだが私とモッチャンは以後同じクラスになることはなかった。ただ、5人の仲良しグループに小田高に入ってから本町小学校（現・三の丸小学校）出身の佐々木洋が加わってきて以後は6名のグループとなり、それからはいつも一緒に行動するようになった。小田高時代はこれといったエピソードは思いつかないが一つだけ挙げるとすれば、**カナヅチだったモッチャンを泳げるようにしてやろう**と小田高のプールで特訓し、とうとう泳げるようにしてあげたことか。それともう一つ我々のグループはひょんな事から中学時代に麻雀を覚え、週末には藤井の家で必ず麻雀をやっていた。堅物のモッチャンも麻雀だけは好きでよく付き合っていた。但し、高校3年になった時大学受験を控えて皆で自発的に申し合わせあれほど好きだった**麻雀はピタリと封印**してしまったことだけは特筆しておく。

学生時代と社会人時代

小田高を卒業したのは1959年（昭和34年）だが6人全てがそのまますんなりと大学に進んだわけではなく、現役合格は佐々木と水口のみ。中澤、テルさん、山本は1浪、モッチャンは2浪して大学に入った。全員が違う大学に進学し、自宅から通学したのは中澤と山本だけ。モッチャンとテルさんは京都の大学に進学し下宿先も同じ北白川通りでごく近かったから、私は1962年（昭和37年）12月に2泊3日で京都を訪れ二人と存分に遊んできた。モッチャンはその時私を洛北の三千院、寂光院、詩仙堂などを案内してくれた。テル

さんは2016年(平成28年)10月に鬼籍に入ってしまった。モッチャんに先立つこと5年。あの時京都で遠来の友を迎えて一緒に遊んでくれた二人はもうこの世にいない。

高校を卒業してからはみんなが同時に顔を合わせる機会は激減したけれど、学生時代も社会に出てからも6人の仲間は全員揃うことは稀でも事あるごとに連絡しあっては集まって飲んでた。私とテルさんとは酒に弱い体質で飲むとすぐに「金時の火事見舞い」という表現通りに顔が真っ赤になり、眠くなってしまうが最後まで付き合うように努力していた。(酒で最後まで付き合うことを努力というかどうかは、人によって意見は違うかもしれないが)。

モッチャンは大学を卒業してNHKに入社。宮崎で放送記者として働いていたが、1969(年昭和44年)28歳の時退職して小田原に戻り、社会福祉法人宝安寺社会事業部に入職した。自宅から通勤していた私は小田原でモッチャンと飲む機会が増えた。二人のときは大概近くの青物町や宮小路当たりの料亭や居酒屋で飲むことが多かった。1982、3年(昭和57、8年)の頃だったと思うが、青物町の居酒屋で飲んだことがあった。カラオケの設備があり、どういう訳かボンゴが置いてあった。このボンゴを叩きながら「奥飛驒慕情」を歌う酔客がいた。私もモッチャンもこの歌は好きだったので、酔客に合わせて大声で唱和した。モッチャンの声はきれいな低音で、私が属していた小田高の合唱部の顧問をされていた田中道子先生が「山本君。望月君にぜひ合唱部に入るように勧めて！」と何度も頼まれたことを思い出す。この頃のモッチャンは身体も大きく健康そのもので愉快的な酒だった。私は酒に強い彼が大いに羨ましかったものだ。

丑寅辰巳会の誕生

日本各地や海外に赴任していた他の4人の仲間も1975年(昭和50年)頃には小田原で集まる事が出来るようになり、忘年会や新年会は毎年開くようになっていた。中澤はその頃熱海にできた新しいホテル「ニューフジヤホテル」にフロントとして勤務していたので、1979年(昭和54年)とその翌年の新年会はその「ニューフジヤホテル」で泊りがけで開催した。参加したのは6名全員。ところで仲間の一人水口には三つ年上の兄がいて、この兄にも幼少時からの仲間が兄を入れて8人いた。同じく酒や麻雀でいつもツルんでいた連中だ。この水口兄弟を軸にして三つ年の違う男たちはいつの間にかお互いに知り合うようになり、特に麻雀や飲み会を一緒にやるようになった。そして彼らは彼らで当然忘年会・新年会を毎年開いていた。あるとき「どうせ二つのグループとも新年会をやるんだから、次は一緒にやろうぜ！」ということで、1981年(昭和56年)の新年会はニューフジヤホテルで合同で開催することになった。そしてそれから合同での飲み会が何回か続いた後、「せっかくこうして集まる会ができたんだから何か名前を付けようじゃないか！」ということになり、私が「丑年、寅年、辰年、巳年の集まりだから丑寅辰巳会はどうだろう？」と提案し、皆の賛同を得てここに泣く子も黙る(?)「丑寅辰巳会」が誕生した。

第1回の総会は1983年(昭和58年)4月にニューフジヤホテルで開催された。それからは毎年開催されるようになり、1994年(平成6年)の第11回目からは中澤が勤務

していた熱海・伊豆山の温泉旅館「ホテルニューさがみや」で開催するようになり、2018年（平成30年）の第35回目まで毎年ニューさがみやで開催してきた。宿泊するわけだから午後6時からの宴会、午後8時から10時頃までのカラオケ、その後1室に持ち込んだ豊富な酒類と宿が用意したおにぎりなどで深夜1時過ぎまで歓談した。先輩後輩の区別なく発言し、時には意見の相違から口論に発展するが、翌朝には皆けろりとして朝風呂を楽しんだ。

モッチちゃんは辰巳の一員として第1回目から参加していた。彼には社会福祉法人宝安寺社会事業部職員と宗教法人定林山宝安寺住職という二つの顔があり、特に檀家に不幸があれば葬儀という欠席できない行事がある。法事のためにやむを得ず不参加ということはあったが、「丑寅辰巳会」への参加は最優先して楽しみにしていたと、亡くなった後ご遺族からうかがって胸が熱くなった。

事業部の仕事の手伝いと檀家世話人

私（山本）の父は神奈川県警の警察官で1935年（昭和10年）頃小田原警察署に異動、小田原市万年4丁目（現・浜町三丁目）に借家住まいを始めた。それがモッチちゃんの家宝安寺のすぐ近くだった。その前は母の実家のある横浜市に住んでいて菩提寺は真言宗のお寺だった。父が1955年（昭和30年）に亡くなり、母が息子の仲良しのモッチちゃんのお寺に葬儀を依頼、墓地も借りて父の墓碑をたてることもできた。それ以来小田原の山本家は曹洞宗の宝安寺を菩提寺として檀家となった。

私は不甲斐ないことにととう生涯の伴侶となる女性に巡り合うこと叶わず、独身のまま母と二人で暮らしていたが、その母を2000年（平成12年）5月に亡くした。母に認知症の症状が見え始めたため私は定年前に59歳で退職していたので、母の死後は城山の分譲マンションで仕事もせずに遊んでいた。それを見ていたモッチちゃんに「お前、遊んでいるなら俺の仕事を手伝ってくれ。パソコンができるし、職員にパソコンを指導してほしい。時給1000円でどうだ？」と持ち掛けられ、ちょうどいいアルバイトだと思い、二つ返事で引き受けた。こうして2001年（平成13年）10月から2005年（平成17年）3月までおよそ3年半、小田原愛児園の園長室で仕事をした。週に2日（月、木）10時から16時までの勤務だったがかなり充実した日々だった。当時各職場の主だった職員は机上にノートパソコンを置いてはいたが、文字通り「置いてある」だけでたまに文書作成ソフトの「WORD」で簡単な連絡文書を作成する程度の使い方だった。根府川や成田などに分散している事業部の施設とネットワークで繋げるなど、考えられない状態だった。E-mailも使いこなすとは言えなかった。モッチちゃんは先ず私を使って身近な職員にパソコンの手ほどきから始めたかったに違いない。私は「この機会にお前もパソコンを買ったら？」と勧めて2001年10月26日小田原の川東地区にある家電量販店に同行してノートパソコンの購入をお手伝いさせてもらった。

彼自身の仕事の手が空けばよく園長室に顔を出して話をした。園児たちにも慕われていて囲まれて相手をしている時は相好を崩していかにも子供が可愛くて仕方がないという様子だった。

後年辰巳の仲間たちもスマホを持ち、LINEでグループを構成して連絡を取り合うようになったが今年の3月28日にはモッチャンから「昨日は愛児園の卒園式でした。80人の卒園生一人一人が愛しくて涙が出ました」というトークが入り、いつも子供たちの事だけを考えていることがよく分った。

宝安寺社会事業部の仕事だけではなく、お寺としての宝安寺の仕事もお手伝いをした。ばらばらに分散していた300軒近い檀家の住所録を作成したが、これは今でもお寺で受け継がれ重宝しているということだった。

一方、宝安寺の一檀家にすぎなかった私は住職であるモッチャンに頼まれて2001年（平成13年）10月10日から檀家世話人を引き受けることになった。これは今でも続いているので今年で20年を経過したことになる。20年間に住職と世話人としてそれこそ数え切れないほどのことがあり、いちいち取り上げて行ってもこの稿をお読みくださっている方にはあまり興味を持たれない方もおられるだろう。ここでは二つのエピソードをご紹介しますにとどめておく。

一つは「**宗教法人曹洞宗宗門護持会関東地区管区集会の第19回の集会に一緒に行ってくれ**」と頼まれて同行した。日にちは2007年（平成19年）10月5日場所は「東京グランドホテル」（東京都港区）。小田原から品川まで新幹線、駅前で昼食後電車で田町まで行きそこからタクシーでホテルへ。法衣の僧侶たちに囲まれながら講演などに出席。午後4時過ぎに終了し小田原に帰った時は雨が降っていたが、タクシーで世話人仲間の坂本さんが経営していた「呑み処さかもと」へ行く。そこで坂本さんを交えて午後8時ごろまで歓談して散会。

もう一つは、2009年の後半に**宝安寺に山門を建設**することになり、世話人で「宝安寺山門建設委員会」を立ち上げ檀家から寄付を募ったりして、計画は進行して行った。そして山門仮組（軸組）検査のため福井の田中木材工業へ望月住職と同行することになった。2010年（平成22年）6月7日小田原駅から飛鳥建設の社員と共に新幹線ひかりに乗車。米原で北陸本線に乗り換え午後1時過ぎ**福井**に着く。昼食後田中木材工業へ行き建設中の宝安寺山門軸組検査に立ち会う。終って宿泊先の**敦賀**のニューサンピアホテルへ。入浴休憩の後山門建設と寺院周辺整備を請け負ったジャクエツ、飛鳥建設の社員らと近くの料亭「壺天」で会食。話は大いに弾んだが8時半頃散会。ホテルに戻って寝た。

福井や**敦賀**など宝安寺の世話人であると同時にモッチャンの親友でなければおそらく私の一生で行く機会は無かったろう。また世話人となったおかげで宝安寺が参加する曹洞宗のいろいろな行事に同行する機会があり、全国各地に散在する同宗の名刹・古寺を訪ねることができた。記録を見ながら上げてみると西の大本山**永平寺**（福井県永平寺町）、東の大本山・**総持寺**（横浜）、**総持寺能登祖院**（輪島）、**宝泉寺**（瀬戸）、**龍泰寺**（関）、**宝慶寺**（大野）、**瑞龍寺**（長岡）など普段行かないようなところへ連れて行ってもらった。モッチャンが世話人に推挙してくれたおかげで見聞を広めることができ、感謝している。

忘れられない出来事

モッチャんと75年に亘る交友の記憶を時系列に沿って縷々述べてきたが、思い出すことが次々に浮かんできてキリがない。そこで時系列に関係なく特に思い出に残っていることを述べておきたい。

1. 藍綬褒章を受章

私がちょうど小田原愛児園の園長室で仕事をしていた2001年（平成13年）4月、モッチャんがその年の春の褒章で藍綬褒章を受章することになった。モッチャんは前年11月に還暦を迎えた年だった。我々親しい友人たちは当然祝いの席を設けた。当初は「望月君の藍綬褒章受章祝賀会」などとしかつめらしい名称を考えていたがそんな堅っ苦しい呼び方は我々らしくないな、と言うことで「モッチャんの藍綬褒章受章を肴に酒を飲む会」と呼ぶことにした。会場は宝安寺世話人のひとり関口富夫さんが経営する「伊勢藤」。辰巳会全員が参加して盛大に祝った。小学校から始まって親友とまでは行かなくても百人は優に超える友人の中で、国から表彰されるような友はモッチャんが初めてで、我々としては大いに鼻が高いし嬉しい出来事だった。

2. 再び仕事を手伝う

2016年8月初め頃モッチャんから「**宝安寺社会事業部の各部署にバラバラに存在しているデータを收拾統一していろいろなデータベースを作りたいので協力してくれないか**」という依頼があった。その頃の私はお堀端通りのナックビル5階にあるフィットネスジム「フォービー」で主に火水金の週三日一日4時間くらいの筋トレに通うだけで、他にすることはなかったので引き受けた。2016年8月18日から月木（後に火金に変更）の週二日午前10時から13時まで一日3時間仕事をするようになった。旧園長室で仕事をしていた2005年3月からおよそ11年半の年月が経過していた、

余談だが10数年前にここで仕事を始めた頃はパソコンを机の上に置いてある職員は数えるほどだったが、久しぶりに見た愛児園と乳児園は建物自体が新築拡大されていた上に職員の机には大画面のデスクトップパソコンが置かれ、あちこちにある事業所とはネットワークが構築されていた。各自がノートパソコンを持ち、あの頃とはまさに隔世の感があった。今度は私の方が刺激を受け無性に欲しくなって、自宅に大画面のデスクトップパソコンを買う羽目になったことを白状しておく。

仲間との交流

1. 飲み会

モッチャんと75年に及ぶ交流について綴ってきたがあれもこれも次々に浮かんできて紙数がいくらあっても足りそうもない。最後に城内小学校6年4組で机を並べた5人（中澤秀夫、藤井暉生、水口幸治、望月郁文、山本哲照）に本町小学校出身の佐々木洋を加えた6人の仲間たちの交流についてお話しておきたい。

この6人は学生時代から常に行動を共にして海山でのキャンプ、旅行などは、たまに誰かが欠けることはあってもいつも一緒だった。集まる時は必ず全員に連絡し、できるだけ

みんなが都合の良い日を選んだ。社会人になってからはさすがに全員が集まることのできないこともあったが、2000年以降はサラリーマンだった佐々木、中澤、水口、山本が定年退職したが、テルさんは親譲りの商店で勤務、モッチャンは寺の住職、社会福祉事業を継承して働いていた。そのため海外旅行などは退職した4名だけで行くことが多くなったが、年に数回行う忘年会などの飲み会にはモッチャンもテルさんも必ず参加してきた。但し、テルさんは2016年10月に急逝。幼い頃からの仲のよい友達は5人になってしまった。

そして若い頃は頑健で酒に強く、私には大いに羨ましく見えたモッチャンは2010年頃から腎臓に疾患を抱え、西洋医学、漢方医学などいろいろ手を尽くしたがとうとう2014年2月から週三日人工透析を受けることになってしまった。但し、透析を始めてからはそれまで制限の多かった飲食は全く自由に摂取できるようになり、それまでは控えていた酒も大いに飲めるようになったので我々仲間は歓迎したものだ。丑寅辰巳会や忘年会などの会食は必ず、モッチャンが人工透析を受ける月水金を除外して行うようにした。

辰巳の仲間たちは年に数回、料亭や居酒屋で飲み会を行っていたがモッチャンには必ず声をかけ、彼自身もこの集まりを何よりも優先して律義に参加してきた。しかし、前述したように数年前から腎臓疾患の他にガンなどを発症し、自宅で療養したり入院したりの生活を送るようになってしまった。

2. メールやラインでの交流

私はこの仲間たちの中では比較的パソコンを始めた時期は早く、1987年（昭和62年）46歳の7月に自宅にデスクトップパソコンを購入していた。そして1997年8月1日から自宅のパソコンがインターネットに接続。最初のE-mailを当時イギリスに住んでいた水口に送ったが生憎その時彼は家族連れでイタリアでバカンス中。ヨーロッパのバカンスは2か月が普通なので、返事が来たのは送ったことを忘れた頃だったがとにかく彼（水口）との交信が最初だった。その後、中澤や佐々木とも交信が始まり、2001年夏佐々木・中澤・水口・山本の4人でアメリカ・カナダをドライブ旅行した時は大いに事前事後にメールで連絡を取り合ったものだ。モッチャンはそれから数年後にパソコンを始め、メール交信の輪に入ってきたが、「私、メールが楽しくて、毎日でも皆様とお話したい気分です！」といかにも仲間と交信できることがうれしくてしょうがないという様子だった。それ以来、われわれ6人の間ではメールでの連絡が普通の通信手段となった。ただ、テルさんだけは皆がいくら勧めてもパソコンに興味を示さず、精々ケータイメールで通信するのがやっとだった。

そのうちに世間はガラケーからスマホの時代になり、ラインが通信手段の主流になってしまった。我々の間では水口がスマホに替えたのを機にラインでグループを作り、初めは佐々木・中澤・水口・山本でグループトークをしていた。モッチャンは2020年夏にスマホに替え同年9月1日に私のスマホのラインに友達として認識された。その時のやり取りは（私）「モッチャン。待ってました。スマホデビュー、おめでとう」（モッチャン）「山本君ありがとう。これからがたいへん。いろいろ教えてね。よろしく。」というもので変換ミスもないしっかりしたものだ。しかもスタンプつきだったので驚いたのをよく覚えている。

そして同時に「辰巳グループ」にも参加してここに傘寿の爺さん5名からなるグループが誕生した。モッチャンがラインのグループトークに自分からコメントを送ってくるのはあまり多くはなかったが、トークには必ず目を通していているということだった。

3. 嬉しかったモッチャンからの電話

私（山本）は前述したように2000年5月に母を亡くしてから、分譲マンションでの一人暮らしを続けていたが、80歳を過ぎてからさすがに身体の衰えを自覚するようになった。このままでは急な病気やケガに襲われた時に対応できないので、老人ホームなどの施設に今のうちに入っておいた方がよかろうと考え、2020年に入ってから長い間福祉事業に携わってきたモッチャンに相談した。すると地域包括支援センターの主任介護支援専門員という女性を紹介してくれた。その女性に自分の現状と今後について相談し、更に専門の紹介業の女性と共に適当な施設を探し、一旦は小田原市蓮正寺にある「介護付き有料老人ホーム」に入所した。それは2020年11月初めの事だった。ところが私の勉強不足でこういう施設は自立者が自由には外出できないシステムになっていることをよく承知していなかったので、私に段々ストレスが溜まってしまった。結局半年後の2021年4月その老人ホームを退所して、小田原市久野にある「サービス付き高齢者向け住宅」（通称「サ高住」）に転居することになった。生活支援を受けられる賃貸マンションで、自由に外出することができる施設である。介護士や看護師が24時間見守ってくれる。

この間5人の仲間たちとはラインやメール、電話などで終始連絡を取り合っていた。みんなが激変した私の生活を気遣ってくれていた。モッチャンはラインにはあまり慣れておらず、それまでメールの送受信に使っていた自分のノートパソコンはコロナ禍によるオンライン教育用に孫娘に譲った形になってしまって、メールも使えなくなってしまったので、私との連絡には主に電話を使うことになった。そしてモッチャンは実に頻繁に私に電話をかけてくれたのである。私が一人暮らしの身には直接声を聞きながら交流できる電話が何よりうれしいということを以前に話したことを覚えていて、そのことを実行してくれたのだ。2020年3月頃城山の分譲マンションにいた時から電話連絡が始まって、蓮正寺の老人ホームにいた時も今のサ高住に移ってから何度も電話をしてくれて話し相手になってくれた。自分がガンの痛みと戦いながら週に三日一日4、5時間にも及ぶ人工透析を受けている身であるにもかかわらず、「山本が一人で退屈しているだろう」と気にかけて電話をしてくれた。スマホ着信音が鳴って「望月郁文」と発信者の名前が出ると、私もそれだけで心が浮き立つように感じたものだ。彼は本当に心根の優しい男だった。もう私のスマホに「望月郁文」という発信者が表示された電話は永久にかかってくることはない、ということがどうしても信じられない。

4. 最後の会食

モッチャンが服用していた抗ガン剤の副作用が2021年春頃からひどくなり、自宅と小林病院の両方で交互に療養する生活となった。佐々木や中澤は早朝のラジオ体操を通じてモ

ッちゃんの家族とも顔見知りになり、自宅にも見舞いに訪れることもあった。そして7月初旬激しい痛みで襲われたモッチャンは救急車で小林病院に搬送された。7月10日モッチャン自身から水口に「抗ガン剤治療を中止し、小林病院に入院して緩和ケア治療を受けることになった」と電話があった。このことは直ちに水口から全員に伝えられた。7月13日には宝安寺で毎年恒例のお盆供養が行われた。私も世話人として参加したがモッチャンは姿を見せなかった。が、その夜彼から電話があつて話げできた。「これからパソコンを起動してみんなにメールするよ」ということだつた。この頃はご家族から「家にいる時は本人も会いたがっていますから、できるだけ皆さまでお見舞いのお出でください」と言われていた。この頃は佐々木が小田原でのテニスやラジオ体操の後などに宝安寺や小林病院を訪れ、本人やご家族と頻繁に連絡を取る役目を引き受けていた。また、自分から発信は難しいがグループでのラインのやり取りは必ず目を通してのことなので、皆がモッチャンあての励ましの言葉を毎日のように送っていた。

但し、この頃のモッチャンの病状はガンが肩の骨にまで転移していて激しい痛みがあり、強い鎮痛剤のため意識が朦朧として話もできないという状況だつた。移動する時は車椅子を使用しなければならなくなっていた。(7/28、佐々木からのメール) かなり事態は切迫しているということを我々はこの時はっきり認識した。8月頃は小林病院から一時帰宅したりまた病院に戻ったりということを繰り返していたが、8月中頃帰宅していた本人が我々4人に会いたいという意思表示があつたということで8月16日(月)の昼に4人揃って宝安寺を訪れた。モッチャンは庫裡2階の介護用ベッドに横になっていて、園夫人、娘の清世さん、女一人、男二人の可愛い孫たちに囲まれていた。ベッドの横にテーブルが置かれ、赤白のワイン、サラミソーセージ、レタスなどが用意されている。この時のモッチャンは意識もはっきりして会話も普通にでき、いつものように笑いの絶えない楽しい会食だつたが、こうしていつもの仲間と酒を飲みながら談笑するのもこれが最後になるかもしれないということ、モッチャンは我々に伝えたかたに違いない。奥さんや娘さんにもその覚悟が感じられて私はいたたまれなかつた。

5. そして、哀しい別れが・・・

2021年9月23日(木)は秋分の日でお彼岸のお中日。私は宝安寺に墓参りに行った。墓参を終えて庫裡に行つて見ると折よく園夫人が在宅していた。「今は小林病院で透析中ですが、あと30分ほどで戻りますからぜひこのままお待ちください」とのこと、彼と話げできる絶好の機会だと思ひ、帰宅を待った。そして帰つてきた彼と話げできた。彼は痰が絡んでそれがなかなか切れず苦しうだつたが、意識ははっきりしてきちんと話げできた。ただ、さすがに長い闘病生活によりやつれている様子はあつた。しかしその日私が生きているモッチャンと会つた最後の日となつた。

2021年10月3日(日)の朝中澤から電話で悲報がもたらされた。モッチャンが昨日(2日)の夜9時過ぎに小林病院で息を引き取つたという。娘さんが知らせてくれたそうだ

がその際、「遺体は庫裡の2階に安置します。17時過ぎには落ち着くと思いますから、ごく親しいお友達はどうぞ顔を見においで下さい」と言われたそうだ。中澤と手分けして藤沢に住む佐々木と山中湖畔にすむ水口とに伝えた。佐々木は来ることになったが、水口は夜間の運転は控えているとので来られないとのことだった。3人は小田原駅前待ち合わせタクシーで宝安寺に向かい、17時過ぎに到着。庫裡の2階に案内された。畳敷きの部屋に布団に横たわったモッチャんの姿があった。ガンの苦痛と戦い続けたとは思えない穏やかな顔で眠っていた。小田原託児所で初めて出会ってから70数年間の思い出が一挙に頭の中を駆け巡って、自然に涙がにじんできた。お互いに80歳を超えたが二人の付き合いはまだまだ続くものと思って疑いもしなかったのに、あっけなく先に逝ってしまった。3人で口々に彼にお別れの言葉を述べて辞去した。

結び

こうして「幽明境を異にする」間柄となってしまった望月郁文君（モッチャん）と私（山本哲照）だが、私の頭の中には子供の頃特に城内小学校でのモッチャんの姿が一番頻りに浮かんでくる。クラスメートの中では大柄で坊ちゃん刈りの頭髪で勉強はどの科目もよくできて穴がなく、人望があり、4年生から6年生までの3年間の9学期でいつも**級長か副級長**を務めていた。字もきれいで運動神経も発達していた。学校への登下校はいつも一緒にふざけたり、口喧嘩をしながら歩いたものだ。ジャンケンをして負けた方が相手のカバンを持たされたりもした。

彼は大柄な体躯に似合わず気は優しくかった。社会福祉法人宝安寺社会事業部の理事長として世の中の弱者と言われる人たちの側に立って生涯をささげたが、これも彼の優しさがそうさせたに違いない。我々6人の仲間でさえ時には意見が合わず口喧嘩以上に発展することはあったが、**モッチャんだけは人と争うようなことは決してなかった。いつもニコニコと笑みを絶やさず控えめにしていた。**丑寅辰巳会の宴会でもカラオケでも部屋に戻ってからの三次会でも聞き役に回ることが多かったが、ひとたび自分の仕事のことなどを聞かれるとその時は訥々とだが熱心に話してくれるのが常だった。生涯をいち僧侶として、またハンディのある人の味方として生きたモッチャんのような友を持ったことは私の幸運であり、誇りでもあった。私にはとても真似のできない**見事な一生だった。**

モッチャん、長い間の友情をありがとう。天国で安らかにお休みください。

合 掌

2021年12月

竹馬の友で宝安寺檀家世話人 山本 哲照

※文中、同期生の方々の敬称は省略しました。また著しい事実誤認がありましたらご指摘ください。訂正すべきであると判断されれば訂正します。